



ピッポ新聞

2010

10

No.252

子どもの本専門店 ピッポ

ピッポ古書クラブ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3
TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
E-mail itoh@pippo.co.jp

『ゆずりは』 歩道
そして、溪流釣りのことなど

「藍染袴お匙帖」（双葉文庫）という藤原緋沙子の短編連作をよんでいたところ「春落葉」という一編があった。

この「春落葉」という言葉からなぜかユズリハを連想した。「ゆずりは」は、漢字で書くと「讓葉」で、図鑑によると「楨」とも書き、別名「親子草（おやこぐさ）」とも表すそうだ。ここから連想ゲームのように、河合醉茗（1874年〜1965年）の「ゆずり葉」という詩と「ゆずりは歩道」二つのことが浮かんだ。

酔茗の詩「ゆずり葉」は、好きな詩の一つだ。きつと、ご存知の方もおいだらうが、短いで紹介しましょう。

子供たちよ。

これは譲り葉の木です。

この譲り葉は

新しい葉が出来る

入り代わつてふるい葉が落ちてしまふのです。

こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

新しい葉が出来ると無造作に落ちる

新しい葉にいのちを譲つてー。

子供たちよ

お前たちは何を欲しがらないでも

凡てのものがお前達に譲られるのです。

太陽の廻るかぎり

譲られるものは絶えません。

輝ける大都会も

そつくりお前たちが譲り受けるのです。

読みきれないほどの書物も

みんなお前たちの手に受取るのです。

幸福なる子供たちよ

お前たちの手はまだ小さいけれどー。

世のお父さん、お母さんたちは

何一つ持つてゆかない。

みんなお前たちに譲つてゆくために

いのちあるもの、よいもの、美しいものを、

一生懸命に造つてゐます。

今、お前たちは気が附かないけれど

ひとりでのいのちは延びる。

鳥のやうにうたひ、花のやうに笑つてゐる間に

気が附いてきます。

そしたら子供たちよ。

もう一度譲り葉の木の下に立つて

譲り葉を見るときが来るでせう。

まあ、いまでも都会が「輝ける都会」であり、

世のお父さんやお母さんが「よいもの、美しい

もの」ばかりを造っているかは、大いに疑問で

あるが……。

この詩の根底を流れるものを、もっと歴史的にはばを広げて考えれば、絵本作家バートンの

『せいめいのれきし』（石井桃子・訳 岩波書店）に通じるものがある。

もう一つの「ゆずり葉歩道」とは、いったいなにか？

この名前をきいてその場所をイメージできるひとは、そうとう大井川水系の沢や山をやったことのあるひとだろう。

「ゆずりは歩道」は大井川支流そのまた支流のまた支流

この「ゆずりは歩道」は栗代川にある「歩道」の名前だ。25年ぐらい前のこと、釣り友だちと初めて栗代川に釣行を計画して、2万5千分の地形図にこの「ゆずりは歩道」の名前をみつけたのだった。ずいぶんしゃれた名前だと感じたものだ。

栗代川には、「このほかに」「ほおじる歩道」「こつぱ歩道」というのもあるが、「こつぱ歩道」などとあると、京都にある「哲学の道」のような、ちゃんと整った小径を想像するのが普通だろうと思う。

ところが栗代川は気軽に散歩に出られる場所ではない。この道は栗代林道から栗代川に下降するための道で、地形図上ではいづれの「歩道」も栗代林道から尾根上をたどり川床までたっしている。実際の道は「獣道」のように荒れて不鮮明な道なのだ。おそらくは、かつて営林署の職員が作業をするために付けられた道だったのだろう。名前も営林署が付けたのかな？ 地形図上では道はえがかれていないから、

すこし山慣れたひとならこれを下れると思うだろう。ところが、この下降点までたどり着くための栗代林道が少しだけ厄介なのは、地形図には表されていないが林道は崩落や地滑りなどでずたずた状態であることだ。

入り口から2キロぐらい進めばもう車では通行不可能になり、そこからは歩くだけである。林道は川床から3百〜4百メートル上に付けられていて、そのほとんどが下降の足がかりもない。垂直に近い斜面は、下降できる場所も限られている。だから地形図上で尾根が川床まで達している場所を下降するしかない。それが「歩道」というわけである。

宝石のような美しいアマゴがいる栗代川

寸又温泉へ行ったことのあるひとは多いでしょうが、道が寸又川とであって最初に右側（左岸側）から流れ込んでいるのが栗代川だ。あまり目立たない小さな川だし、少し上流に取水堰があるため、水の流れもたいしたことはない。

しかし、取水堰より上は結構水量があり、その最上流は、倉沢といって、南アルプスの前衛山のひとつ大無間山から流れ出ている。倉沢は源流部で、こつぱ沢と合流して水量を増す。これより下流は流れ下る途中で幾つかの沢が合流して水量がさらにましてゆくのだ。

栗代川釣行は、歩き出してから車に戻る

までずっと緊張を強いられる沢の一つだった。しかし、一時期栗代川にばかり通い続けたことがある。それは何といても天然に近いアマゴやイワナが釣れるからだ。

アマゴの最大の特徴は、その体側に宝石をちりばめたような鮮やかなオレンジ色の斑点があることだが、近隣の里川で釣れるアマゴはこの斑点が極端に少ないし、小さいし、色も汚い。なぜならそのほとんどが養魚場の発眼卵や稚魚を放流したものであるからだ。天然のアマゴなど近來とんとお目にかかれないのだ。

しかし、栗代のアマゴは濃いオレンジ色の斑点が大きく鮮やかで、宝石のように美しかった。アマゴ本来の姿が栗代にはあったのだ（ここ10年以上行ってないから現在は不明）。

栗代川は記憶によれば、たしかホオジロ沢から上流はイワナだけの沢だった。このイワナも大和イワナ系の地のイワナで、これにも細かいオレンジの斑点があるのが特徴だった。いまや大井川の源流近くでも放流によってニッコウイワナ系との混雑種のイワナが多い。

栗代川の溪流魚たちは、なぜ地の魚として純血に近い（純血種と断言しないのは科学的に調べたわけではないので）といえるのか。それはさきほども書いたように、この栗代川の地形的な理由によるとはくは思いうのだ。

寸又水系に通い続けていた頃、毎年1回は寸又川や各沢にばくら（溪流会を中心に、といってもぼくは所属していなかったが、

お手伝いをした)は、アマゴの稚魚を放流していた。大きなビニール袋に水と酸素をいれ、その中に稚魚を泳がせて、ザックで背負ってそれぞれお好みの場所(本流や沢)へ散っていくのだ。その放流でも、ついぞ栗代に放流したとは聞いたことが無かった。

これは栗代は下降点まで時間と歩行が厄介だったからだと思う。下降点までたどり着いても、さらに1時間近くも細々として、一部崩れている杣道をくだらなければならなかったからである。重いザックを背負っては、それは不可能に近かったのではないだろうか。このことが幸いして、人工魚と交わらず天然の溪流魚たちの世界が維持できていたのだろう。

ヨタカが鳴く夜の林道歩き

栗代へ入渓するのは、たいがいは夜中から明け方にかけてヘッドランプをつけて林道を歩くのである。気味の悪いヨタカの鳴き声も聞こえてくる林道歩きは、ほとんどの場合は複数で釣行していた。栗代に限らず、ぼくらの釣りスタイルは夜中から行動して、翌日の夜帰宅するというものだった。

急斜面のガレている箇所は、かすかな踏み後をランプで照らしながらトラバースするのだが、高所恐怖症のぼくは、こういう所は昼間より暗い方が高度感を感じないからかえってつごうが良かった。しかし、1箇所どうしてもロープが必要な崖もあり、栗代林道は簡単には歩行を許してくれない。

しかも、夜の林道歩きは思わぬことに遭

遇もすることもある。あるとき4人で林道を歩いていてクマに出会ってしまった。トツプが「追い、クマだぞ!」というので2番手にいたぼくは暗がり透過してみると大きなクマが林道上を走ってゆくのがみえた。

ちよつとさきに進むとススキが群生していて、その一部分にススキがかさなつて敷かれた状態になっていた。多分ここを今晩のねぐらにしていたのだろう。人間がきたのであわてて逃げていったようだ。

クマさんの安眠を妨害して「大変失礼しました」つてところだ。だがね、もしこれが一人で歩いていたら、こんな余裕などあるはずもない。ぼくはきつと、そこから先へは進めずに逃げ帰ったことだろう。

いつも複数で入渓すると書いたが、たしか3度ほど単独で栗代に入ることがある。

店を終わってから夜遅く家を出るのだが、暗い林道を一人で歩くのが恐いので、千頭のまだ人家のある場所に車を止めて仮眠をとつて、明るくなつてから林道を歩くのだ。クマに立ちむかう気は更々ないが、腰にはいつもナタをつるして歩いたものだった。寸又水系は野性動物と出会う機会が多い沢である。(野生動物に出会った話はたくさんあるが、それはまた別の機会に)

栗代川単独入渓の体験

大井川水系のさまざまな溪に釣りに出かけたが、釣行の三分一は単独だった。特になぜ栗代の単独行が記憶にあるかといえば、

それぞれに強烈で忘れられないできごとにぶつかったからだ。

一番恐ろしかったのは、水のない石ばかりの急傾斜の沢を横切つてしばらく歩いたとき、いま通りすぎた沢から落雷のようなすさまじい音が響いてきた。それが連続して地響きのような音がしているのだった。走つて戻つてみると、大きな石がぶつかり合つて落下していて火花まで出していた。雪崩のように沢を落下する様子は身がちじむ思いがした。後2分通過が遅かつたらミソチになつた可能性だつてあつただろう。

また別のときはホオジロ歩道を下降し、川床に着いて、遡行を開始してしばらくすると、行く手を高さ十五センチほどの滝に阻まれた。兩岸は壁になつていて。見渡すと、滝の右手の崖に錆びついたワイヤーが垂れ下がっていた。滝を乗り越えるにはこれを登つていけばよいのだと、軽い気持ちでワイヤーに取りついたのである。

しかし、中ほどまで登つたのだが、どこにも手がかり足がかりが無いのだ。ここまでは腕の力で登つたが、このまま登つて途中で力つきたら落下する危険があることに気付いた。「やべー」と思った。まだ腕に力が残っているうちにもどつたのだった。

高巻きができる場所を探したがとうとう見つけることができずに諦めて、林道までとぼとぼとどつたのだ。が、今度は林道上でカスミ網で野鳥を密猟している男たちに出会ってしまった。見るからに別の世界に住む男たちだったので、下を向いて静かに通り過ぎた。

帰って釣り友に話したところ、「そんなさびたワイヤなんて恐くて、誰も登る人なんていないよ。その滝はもつとずつと手前が高巻きの入り口がある」というではないか。ああ、なんてこった！

さて、ここまで書いたのだから、後一回の単独行の体験も語らなければ不公平というものだ。(何が不公平なのか本人にも意味が分からないが)

これは恐いと言うより自然現象のものすごさを目撃したのだった。

静岡県では溪流の解禁は3月1日と決まっているが、これはまだ解禁間もないところで、南アルプスの山並みは雪で真っ白、溪筋も新芽はおるか冬の様相が多く残っている。

上の林道から歩いて入溪するというのは、まだ途中が凍結している可能性があり、危険なので寸又川まで車で下って、栗代川が合流する橋から入溪した。おそらく入溪者は、今年ぼくがはじめてだと勝手に決めて、期待を込めて川床に降りた。

普段は釣りにならない区間を、ときには冷たい水に浸かりながら遡行を開始した。この時期の釣りはもっぱら餌釣りで、しかも流れのある瀬ではなく、流れの遅い不可身を中心にブドウ虫を針に刺して振り込むのだ。ポイントごとに竿を出しながら遡行するが、釣果は余り芳しくはない。

そうこうするうちに川幅いっぱい流れが広がっている場所に来た。右岸側は深く、

左岸側は水深は浅く遡行にはなんら問題はないのだが、よく見ると、左岸側にいかにも崩落しそうな巨大な氷柱が何本も立っている。その氷柱たるや高さ2〜3メートルもあり、太さだつて三〜四十cmもあるうかという見事なものだった。

こんな巨大な氷柱が静岡県でもできるのかと感動した。よく観察すると、鍾乳洞の石筍のように、崖からしみ出る水が冬中かかって、この巨大氷柱をつくったことが分かった。下の方は分厚い氷でこつこつしているが固まって氷床をなしている。

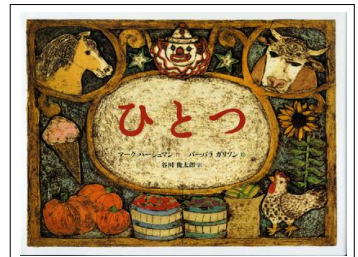
それは見応えがあるのだが、3月を迎えてかなり解け掛かっているようだ。通過するには少々危険を感じた。そこで、ぼくは考えたすえ石を投げて、この氷柱を壊して通過したのであった。

「ゆずりは歩道」がある栗代川は、ヘルメットを被り、四十メートルのロープと、エイト環とカラビナとハーネスが必携の渓で、いつだって緊張を強いられる沢なのだ。今回は「ゆずりは」からとんでもない方向にいつてしまったが、続きはいずれまた。

ねー、この本読んだ

『ひとつ』(マーク・ハーシュマン・作
バーバラ・ガリソン・絵 谷川俊太郎・訳

1260円 福音館書店)



数の「ひとつ」は小さいように見えるけど、実はどんな大きいものだって、一つで表すことができるのだ。一あるものも、一あるものだって単位や見方をかえれば、一で表すことができる。一

概念がわかる絵本。

『ともだち』(木坂涼・作 さとうあや・絵 1260円 偕成社) この童話のく



まのおじいさんとねずみのぼうやのほほえましいやりとりは、わたしたちが忘れてしまった、子どもと大人のあべき関係を思い出させてくれる。この5編の短編連作の中には、大人が子どももの心を受け入れるってことが、てどんなに大切かを教えてくれる。

今月の注目の新刊2冊(予定)

『哲夫の春休み』(斉藤惇夫・作 金井田英律子・画 2625円 岩波書店 十八年ぶりの書き下ろし)

『それほんと?』(松岡享子・文 長新太・画 1365円 福音館書店 装丁変更)